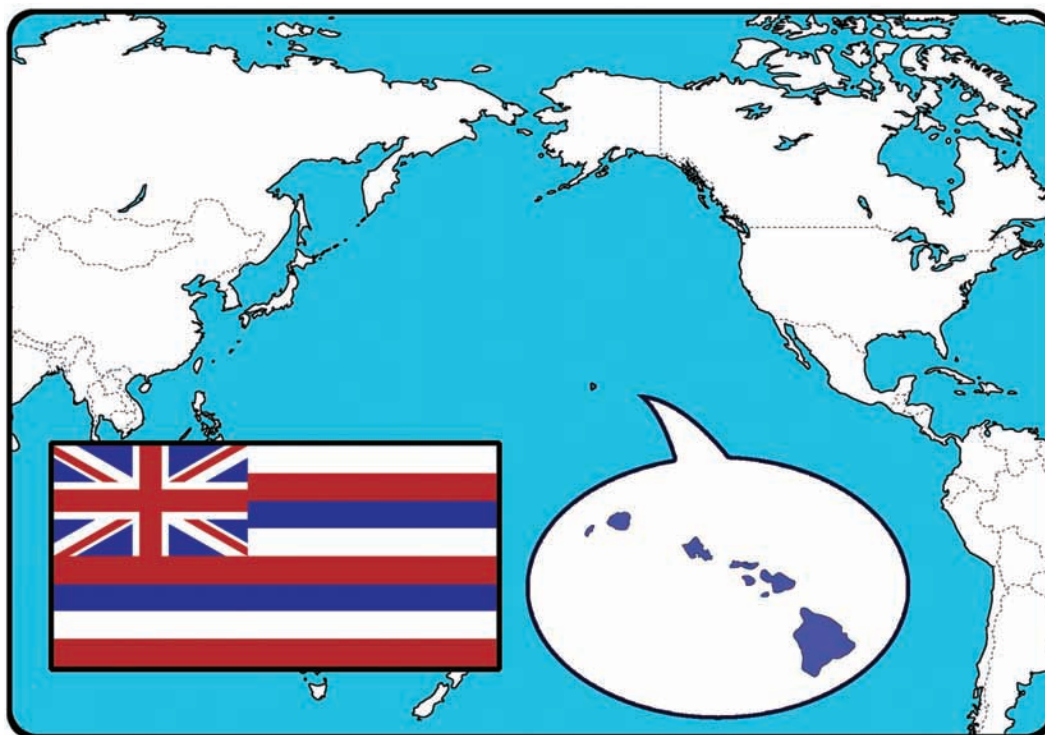


Ⅱ 移民の展開 —各国(地域)に羽ばたいたウラシーンチュ—

II. Expansion of Emigration —Urashinchu Launching Out into Nations (Regions)—

1 ハワイへ渡ったウラシーンチュ Urashinchu Who Crossed Over to Hawaii



沖縄からハワイへ渡った初めての移民は、契約移民として1899（明治32）年にサトウキビ^{こうち}耕地へ送られた26人の労働者でした。浦添からハワイへ最初に渡ったのは、外務省の「^{かいがいりょけんかふひょう}海外旅券下付表」によると、1904（明治37）年の9人の自由移民です。その後、ハワイへは明治・大正期に数多くの人々が渡っていましたが、1924（大正13）年の^{はいにちいみんほう}排日移民法により、日本からアメリカ合衆国への移民はすべて中止され、アメリカ合衆国の^{りょうど}領土になったハワイへの移民も、昭和戦前期は非常に少なくなりました。

戦前の浦添は、都市の首里・那覇の隣にあっても農村だったので、ウラシーンチュは、農業労働者としてサトウキビやパイナップルの耕地や工場で働きました。当時の移民は、お金を稼いで郷里へ送るのが目的でした。旅費ができると帰国し、郷里に瓦ぶきの家を建てるなど、経済的な成功者が浦添にもいまし

た。戦後は、呼び寄せや、戦争花嫁で渡った人々がいましたが、戦前の数には及びませんでした。

Nine people in 1904 were the first to move from Urasoe to Hawaii. After that, many people took passage across the sea, but all emigration from Japan to the United States was stopped in 1924, and even emigration to Hawaii, which had become a territory of the United States, declined considerably. Urashinchu worked in factories or on sugarcane and pineapple plantations. After the war, there were people who emigrated either because they were sent for by relatives or through marriage to someone involved with the US military, but the numbers never again reached the prewar levels.



写真4 1906年に渡航した津波清太の木製の荷札

Wood shipping tag belonging to Seita Tsuha who journeyed overseas in 1906



写真5 農業労働者のランチボックス
Farm laborer's lunchbox

写真6 ハワイの慈光園境内に建つハワイ沖縄移民65周年記念碑。1965年建立。
Memorial monument erected at Jikoen in Hawaii



2 戦前のハワイのくらしと戦争

Life in Hawaii Before the War and During World War II

ハワイといえば楽園のイメージですが、決して「金のなる木」があったわけ
ではありません。サトウキビ耕地などで農業をした一世の苦労は並大抵のもの
ではありませんでした。それでも、ウチナーンチュは、その勤勉さ・正直さ・
忍耐力・団結心を発揮し、経営者である白人、先住民、他国移民と競争してハ
ワイ社会の階段を昇っていきました。また、模合による助け合いをおこないま
した。親戚や知人のつながりが他府県移民より強かったといえるでしょう。ハ
ワイの一世は子どもを高校や大学へ進学させ、二世の有望な人材を育てました。

戦時中、日本人は敵性外国人となりましたが、ハワイ二世の多くは志願して、
第100大隊や442連隊戦闘団としてヨーロッパ戦線で戦いました。このなかに
ウラシーンチュの二世も含まれていました。また、沖縄戦において通訳兵を務
めた人もいました。かれらは、大きな犠牲を払いながらも、人種差別されてい
た日本人の地位回復に貢献しました。

写真7 カウアイ島へ渡った比嘉カメ子の家族

Family of Kameko Higa who
moved to Hawaii before the war



The first generation Okinawan emigrants who moved to Hawaii worked on sugarcane plantations and performed other kinds of manual labor. They experienced great difficulties, but demonstrated their industry, honesty, perseverance, and solidarity, and were able to climb the ranks of Hawaiian society.

During the war, Japanese were considered enemy aliens, but many of the second generation in Hawaii volunteered to fight on the front lines in Europe. Second generation Urashinchu were among this group. There were also some who served as interpreter-soldiers during the Battle of Okinawa. While making a great sacrifice, they contributed to restoring the social position of Japanese people, who had been racially discriminated against.

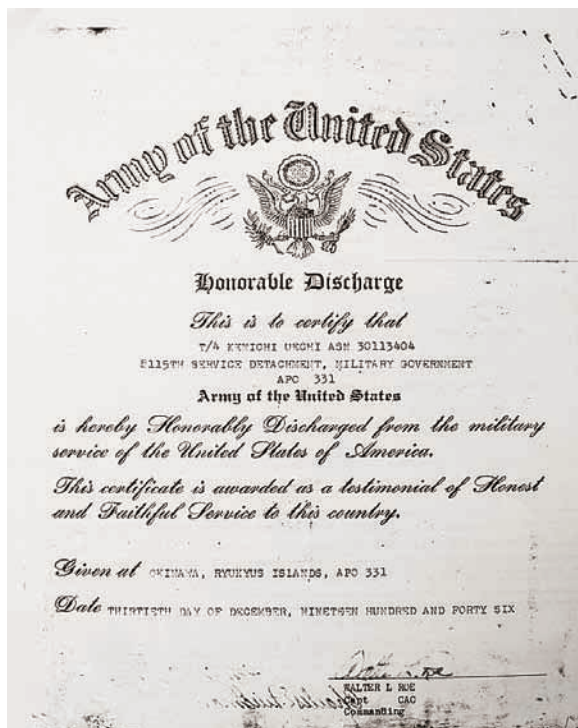


写真8 ウエチケンイチ氏の米軍除隊証書
Certificate of Honorable Discharge of
Kenichi Uechi



写真9 第100大隊に加わった日系人たち
Ethnic Japanese who joined the 100th
Infantry Battalion

3 戦後のハワイの暮らし *Life in Hawaii After the War*

沖縄戦による、郷土の大きな被害を間近にみた二世兵士^{にせいへいし}などの呼びかけもあり、戦後、移民の人々は、生活物資^{ぶっし}や学用品や家畜を送るなどの援助をおこないました。ハワイ移民と郷土沖縄との絆は、このような活動を通して一層強くなりました。

ハワイのウラシーンチュは二世・三世・四世の時代に入っています。時代が変わっても沖縄の習慣や文化に対する愛着は強く、三線^{さんしん}・太鼓・琴など文化の継承^{けいしょう}がさかんです。また、生まれ故郷^{しんじょう}を愛する心情も熱く、移民関係資料も大事に保存されています。

現在、ハワイ浦添市^{しじんかい}人会を中心に、戦後移民とともに、ウラシーンチュもハワイ沖縄連合会の一会員として活動しています。

There were also calls for assistance put forth by Nisei soldiers who had witnessed the enormous damage to their homeland due to the fighting in Okinawa. After the war, emigrants sent essential commodities, school supplies and even livestock as well as provided other types of aid. These activities made the bond between Hawaiian immigrants and their homeland of Okinawa much stronger.

Even as times changed, emigrants' attachment to Okinawan customs and culture was strong, and sanshin, taiko, koto and other cultural traditions have been enthusiastically carried on by the younger generations.

写真10 ホノルル市に建つ日本人
移民の慰霊碑
Memorial monument
erected on Honolulu





写真11 戦後初の軍人花嫁を紹介する新聞記事（1948年）
Newspaper article introducing the first military bride after the war

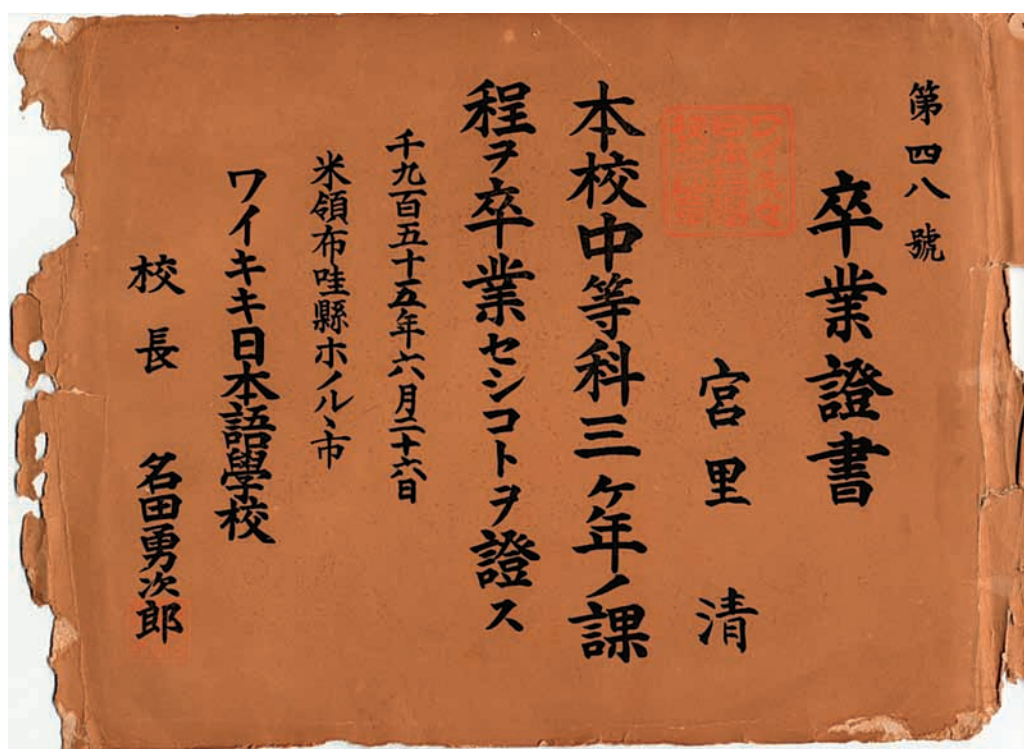
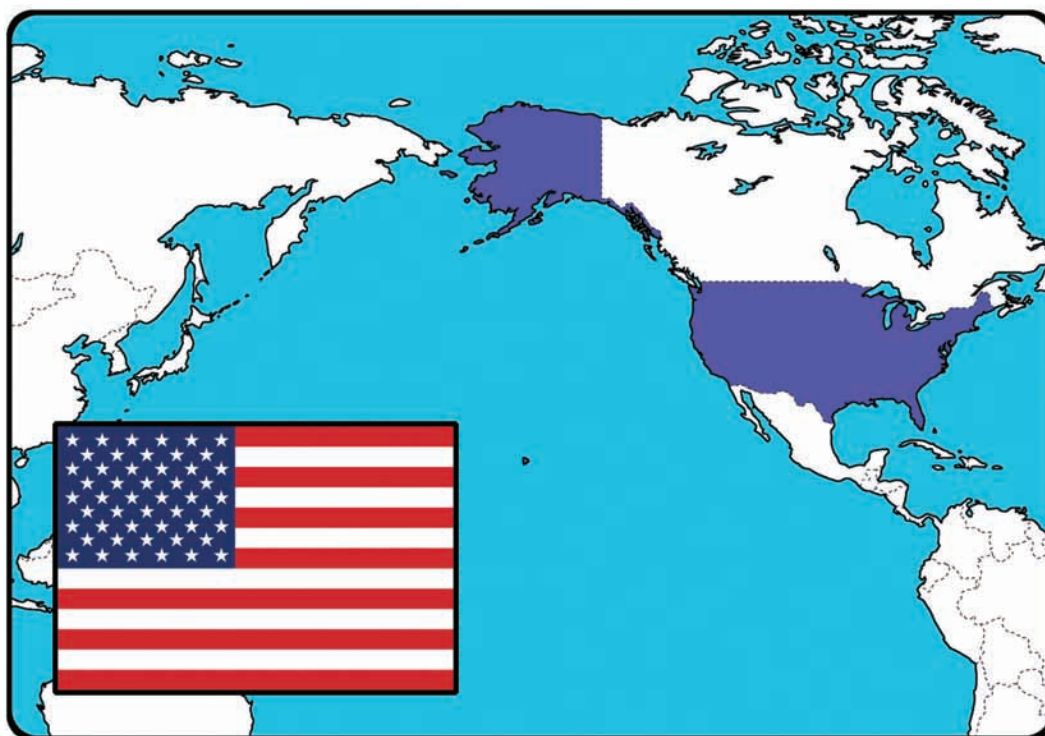


写真12 ホノルル市の日本語学校の卒業証書（1955年）
Diploma from a Japanese-language school in Honolulu

4 アメリカ合衆国本土 *US Mainland*



戦前、沖縄から移民した人々は、アメリカ合衆国西海岸のカリフォルニア州に多く住んでいました。浦添からは、1919（大正8）年に1人が合衆国本土に渡航して以降、戦前の移民数は6人にすぎませんでした。しかし、アメリカ合衆国本土は賃金が高かったため、のちにハワイから転住した移民も多くいました。職業は農業のほか、自由移民として渡った人々のなかには、レストラン・ホテル業など都市型の職業につく人もいました。

戦後は呼び寄せ移民や、アメリカ軍関係者と結婚した女性たちが、基地のあるワシントン州など各地に移住しています。現在、アメリカ合衆国本土のウラシーンチュは、ロサンゼルス市にある北米沖縄県人会の会員として活動しています。

Beginning with the one person from Urasoe who made the voyage to the United States mainland in 1919, the number of emigrants before the war totaled six. However, because wages were high in the US mainland, there were also many emigrants who relocated there from Hawaii. In addition to agriculture, people also found employment in restaurants, hotels and other urban occupations. After the war, people summoned by their relatives and some women who married men associated with the US military moved to settle in various parts of the United States.

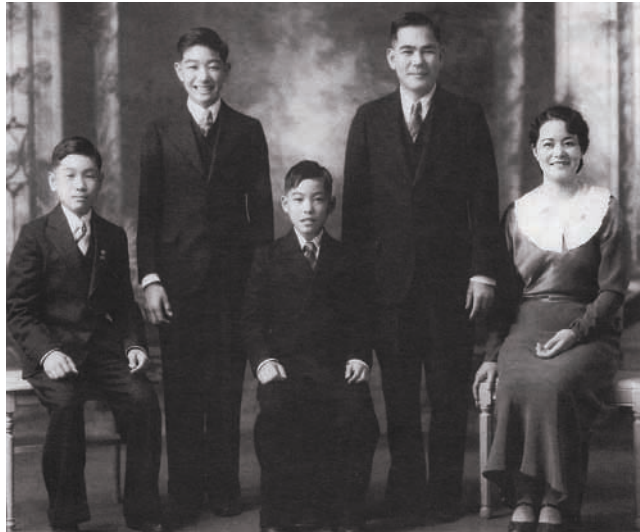
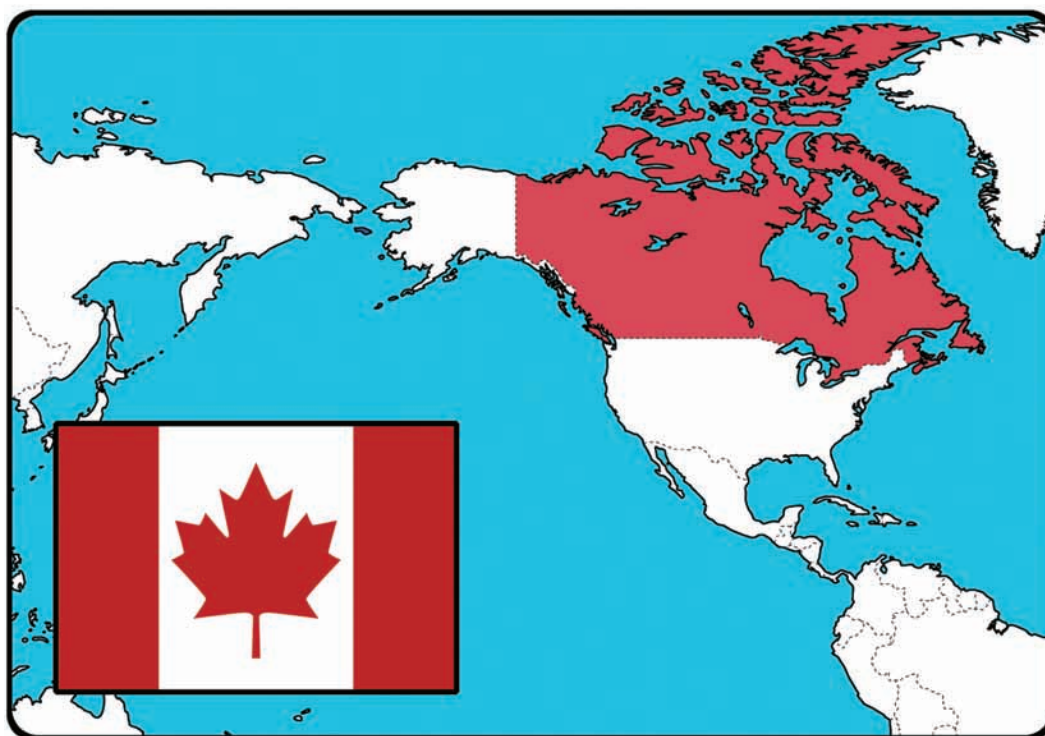


写真13 1905年に移民した内間安珍の家族（1933年）
Family of Anchin Uchima who emigrated in 1905



写真14 北米沖縄芸能保存会の記念写真（1966年）
Picture of a Okinawa arts preservation association in the U.S.

5 カナダ Canada

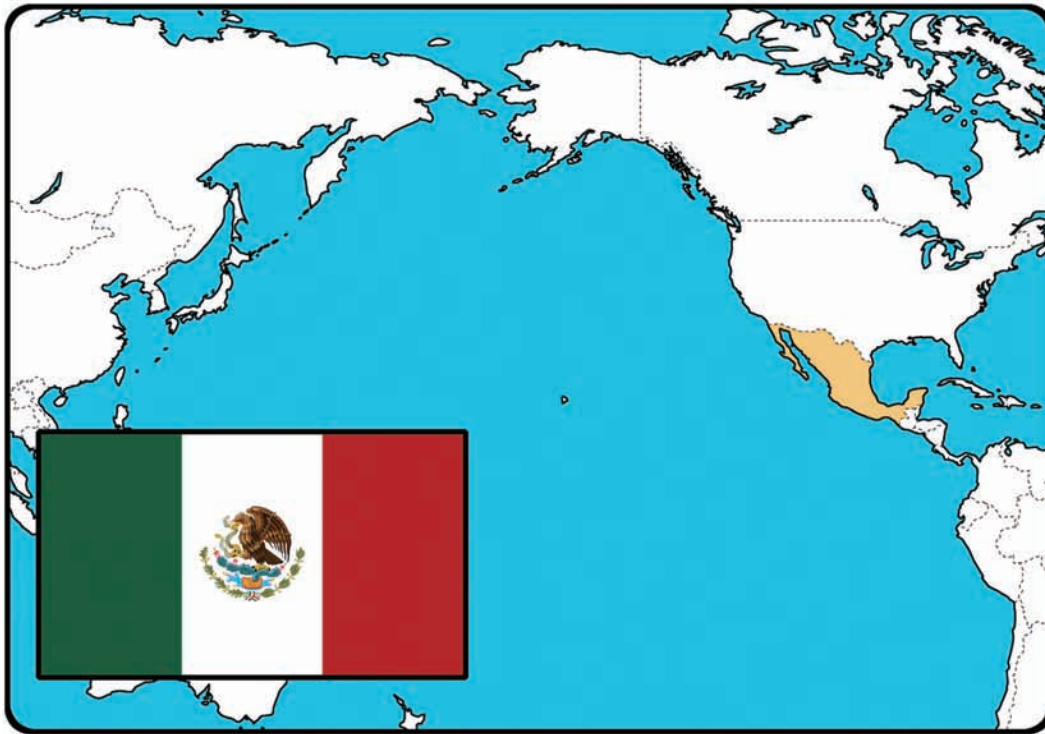


寒冷地^{かんれいち}カナダへのウラシーンチュの移民は、戦前は1907（明治40）年の2人が初回で、合計3人にすぎませんでした。この初回移民は、沖縄初のカナダ移民です。そのうちの1人は、鉄道建設のための3年契約の東京移民合資会社取り扱いの労働者でした。戦後のカナダ移民は、自由移民として、農業・漁業のほか、庭師など都市型の職業につく人が多くいました。戦後、1968（昭和43）年の6人以後、カナダへの沖縄移民の合計は102人となりました。そのなかにウラシーンチュが1人います。

Urashinchu emigration to Canada comprised two people in 1907 on the initial voyage prior to the war and eventually totaled three. One of those who crossed over first worked on construction of the railway. Of the emigrants to Canada after the war, there were many who found work as landscape gardeners or in other urban occupations as well as agriculture and fisheries. After World War II, a total of 102 people emigrated from Okinawa to Canada. One of these was an Urashinchu.

6 メキシコ

Mexico



沖縄からメキシコへの移民は、1904（明治37）年、3年契約の炭鉱労働者^{たんこう}として渡った東洋移民合資会社取り扱いの契約移民が初回でした。メキシコへの移民は、この初期の炭鉱労働者のほか、サトウキビ耕地への農業労働者が主でした。しかし、賃金^{ちんぎん}の高い隣国アメリカ合衆国本土への転住^{てんじゅう}が多く、また、密入国^{みつにゅうこく}も少なくありませんでした。

浦添からは、戦前は1906（明治39）年8人、翌年1人の合計9人が移民しました。戦後、沖縄からの移民は、1949（昭和24）年の1人以後、合計12人でしたが、ウラシーンチュはいませんでした。

Emigration from Okinawa to Mexico took place for the first time when people crossed over to work in the coal mines in 1904. In Mexico, in addition to coal mining, emigrants worked mainly on sugarcane plantations, but not a few of these relocated or illegally entered the US mainland where wages were higher.

Prior to the war, there were eight people from Urasoe who emigrated in 1906 and one more the following year for a total of nine. After the war, emigrants from Okinawa numbered 12, but none of these were Urashinchu.

7 ブラジルへ渡ったウラシーンチュ *Urashinchu Who Moved to Brazil*



日本からブラジルへの移民は、1908（明治41）年、沖縄出身者が全体の42%（781人中の325人）を占めた初回^{かさとまる}笠戸丸移民から始まりますが、そのなかにウラシーンチュは含まれていませんでした。当時の移民は、労働者3人を含む家族単位でいく決まりでした。かれらは、コーヒー園で働く契約移民で、初期はサンパウロ州の援助、のちには日本政府の援助を受けて渡航しました。

浦添からブラジルへの移民の始まりは、1917（大正6）年の81人でした。この年は、日本政府による沖縄からブラジルへの^{いみんそうしゅつせいげん}移民送出制限が解除された年でした。そのため、沖縄から大量の移民が送り出され、ブラジル移民ブームが起きました。移民はコーヒー園など広大な地域に移り住み、農業労働をしていましたが、十分に稼ぐことができず、収入と生活の向上のため耕地を転々と移動しました。また、しだいに都市の近くに移り住み、野菜栽培などをする人や、都市部で商業やサービス業につく人が増えました。ウラシーンチュのブラジル移民数の合計は、戦前は238人、戦後は369人となっています。

Emigration from Urasoe to Brazil started with 81 people in 1917. They worked on coffee plantations and in other jobs, but migrated from area to area cultivating fields to improve their lives and income. Gradually, the number of people increased who grew vegetables or were involved in other agriculture in the suburban areas as well as those who

obtained work in commerce and service industries in cities. The total number of Urashinchu emigrants to Brazil was 238 before the war and 369 after the war.



写真15 海外興業株式会社のポスター
Poster of the Sociedade de
Desenvolvimento Internacional



写真17 海外興業株式会社ブラジル支社
Brazilian branch of the Sociedade
de Desenvolvimento Internacional



写真16 海外興業株式会社のポスター
Poster of the Sociedade de
Desenvolvimento Internacional

8 ブラジルのくらしと戦争

Life in Brazil and During World War II

日本人移民の大多数が住むサンパウロ州は、気候が沖縄と似ており、ウラシーンチュにとっても住みやすいところでした。戦前、かれらの多くは、農場で働きました。

ところが、太平洋戦争時には^{てきせいがいこくじん}敵性外国人となり、日本語教育・集会・移動などの制限を受け、不自由な生活を強いられました。

戦後は、日本の敗戦により、ブラジルに永住を考えるようになり、^{にせい}二世の教育にも力を入れるようになりました。一方、日本人同士の終戦の考えかたの違いにより、勝ち組・負け組に分かれて争いが起きました。沖縄移民は「勝ち組」が多かったようです。

During the Pacific War, Japanese immigrants were regarded as enemy aliens, and restrictions were placed on Japanese-language education, gatherings, movement and other liberties. They were forced into difficult lives.

After the war, the defeat of Japan led emigrants to consider permanently residing in Brazil and they devoted themselves to their children's education. Meanwhile, controversy arose as the Japanese there split amongst themselves in to a winning faction and a losing faction depending on how they viewed the end of the war in regard to Japan. Many of the Okinawan emigrants sided with the winning faction.



写真18 綿摘み Picking cotton



写真19 コーヒーの収穫 Coffee harvesting scene



写真20 栽培する花畑にて A flower field

写真21 サントスの公園内に建つブラジル
日本人移民90周年記念碑（1998年）
Memorial in Santos park to
commemorate 90 years of Japanese
immigration



9 戦後のブラジルの暮らし

Life in Brazil After World War II

戦後の沖縄からブラジルへは、1949（昭和24）年に5人が移民したのを始まりとして、合計9,494人もの人々が渡航しました。はじめは、契約農場で働いていましたが、別の耕地を求めて引っ越したり、親戚や知人を頼り、都市部へ移ったりする人が増えました。平均して5～6回、移住地や職業を変えています。市場での花売りやパステス（てんぷらの一種）売り、野菜売り、縫製業、洗濯業を営む人が多くいました。

移民の多くは、郷里への思いや冠婚葬祭、デカセギのために一時帰国をしています。仏壇を持ち、盆・正月には親戚一同が集まるなど、古くからの沖縄の風習が根強く残っている家庭もあります。夫婦間ではウチナーグチ、親子間では現地のポルトガル語、家族間ではウチナーグチとポルトガル語を混ぜて話すことが多いようです。

ブラジル沖縄県人会は、44の支部で構成され、一年を通して多くの活動をし



写真22 サンパウロ市のパステス売り
Selling pastes

ています。ウラシオンチュも在伯浦添市郷友会を結成し、地域社会に貢献しています。



写真23 パステス。肉や野菜など、いろいろな具が入っている。

Pastes stuffed with meat, vegetables and a variety of fillings

Emigration from Okinawa to Brazil after the war started with five people in 1949, and eventually this figure reached a staggering 9,494 people who made the long voyage. Initially, they worked as contract farmers, but more and more moved on in search of other arable land, or they relied on relatives or acquaintances and moved to the city. On average, these emigrants changed occupations and settlements five or six times. There were many people who sold flowers, pastes, vegetables or other items in the market as well as those who owned sewing and cleaning businesses.



写真24 てんぷらなどの屋台が並ぶブラジル沖縄移民100周年前夜祭(2008年)

Open-air stalls selling tempura and other foods at a festival



写真25 サンパウロ市のブラジル沖縄県人会館
Building of the Okinawa Association of Brazil

10 アルゼンチンへ渡ったウラシーンチュ *Urashinchu Who Moved to Argentina*



アルゼンチンは、日本から最も遠い地球の反対側に位置するため、戦前は、船で約50日もかかりました。移民するには相当な決断が必要だったと思われます。戦前のアルゼンチンは、スペインやイタリアなどのヨーロッパ系移民の多い国で、自由移民をすべて受け入れていました。しかし、アジアからの移民は少なく、日本人移民もわずかでした。日本からアルゼンチンへの集団移民は、ブラジルへの初回^{かさとまる}笠戸丸移民の一部が、1908^{てんじゅう}（明治41）年に転住したことによって始まります。そのなかに沖縄移民も含まれていました。アルゼンチンへのウラシーンチュの移民は、戦前は、1931（昭和6）年の1人が最初で、合計4人でした。戦後は、16人が渡航していると思われます。



写真26 うるま園に建つ沖縄県人移民100周年記念碑（2008年）
Monument commemorating
100 years of Okinawa
Prefecture Immigration



写真27

ブエノスアイレス郊外
の花^か卉^き栽培
Cultivating flowers
outside of Buenos Aires



写真28 アルゼンチンに住むウラシーンチュ（2008年）
Urashinchus living in Argentina

Argentina is located on the other side of the world from Japan. Before the war, the voyage would take roughly 50 days by ship. It seems to have required considerable determination to emigrate there. Group emigration from Japan to Argentina started with the relocation of some emigrants to Brazil in 1908. That group included some Okinawans. Urashinchu emigration to Argentina amounted to four people before the war with the first one making the trip in 1931. After the war, there seems to have been 16 people who made the passage.

11 アルゼンチンの暮らし *Life in Argentina*

戦前のアルゼンチンは、日本よりも先進国でした。首都ブエノスアイレス市には早くから水道がひかれ、エレベーターがあり、地下鉄も走っていました。そのため、人々は都市へと集まりました。

賃金も生活水準も高いアルゼンチンと、当時の日本とは経済的に大きな差がありました。一労働者から出発した日本人移民の職業は限られ、初期は港や工場で働きました。しだいに都市内で洗染業（洗濯業と染色業）、都市郊外では花きや野菜栽培業を営むようになりました。

日系人のなかでも、沖縄移民は、戦前は50%以上、戦後は70%以上を占めています。沖縄移民の団結による在亜沖縄県人連合会が設立され、県人会館をもち、民謡・舞踊・エイサー・空手など沖縄文化が継承されています。アルゼンチンのウラシーンチュは、かつて宜野湾市と合同した組織をもっていましたが、現在では浦添市民会を結成して活動しています。



写真29 ブエノスアイレス市でクリーニング店を経営する夫婦（妻）
Couple managing a Laundromat



写真30 ブエノスアイレス市でクリーニング店を経営する夫婦（夫）
Couple managing a Laundromat

Argentina before the war had high wages and a high standard of living, and there was a big difference economically compared with Japan at the time. Occupations for Japanese emigrants were limited, though. In the initial stage, emigrants worked at ports and factories. Gradually, they moved into the cleaning business and dye industry in urban areas, or cultivated flowers and vegetables in the suburbs. Okinawan immigrants accounted for over 50% of the ethnic Japanese population before the war and more than 70% after. Even today, folk songs, dancing, Eisa, karate and other aspects of Okinawa culture are being handed down.



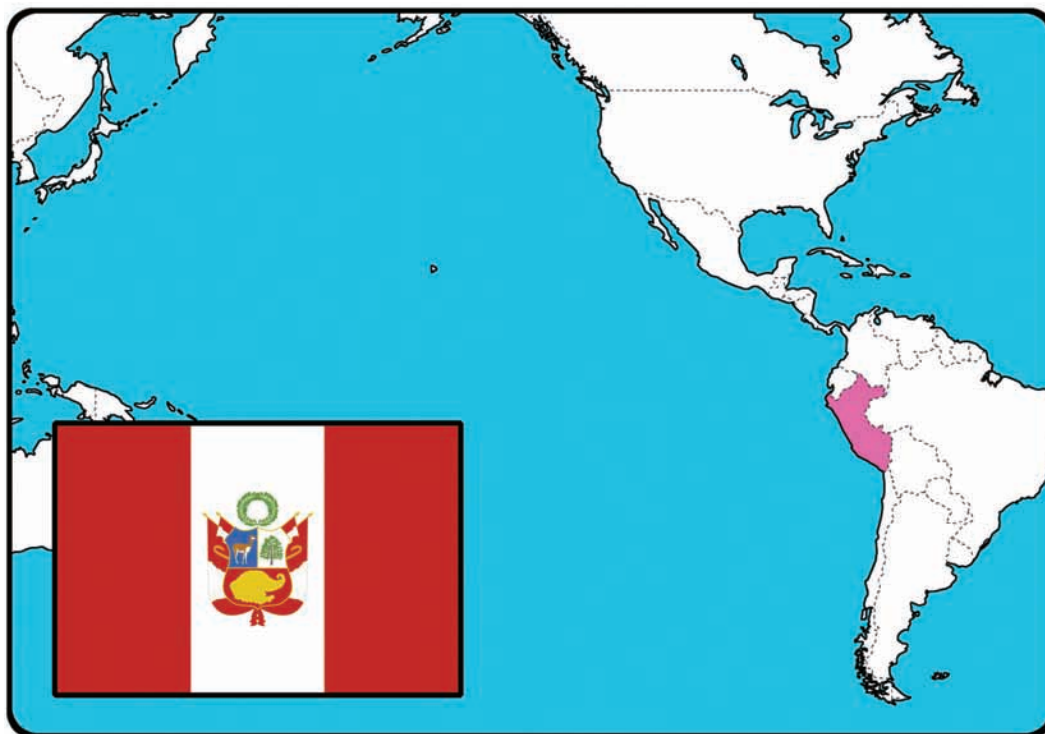
写真31 フロレンシオ・バレラの野菜畑
Vegetable field in Florencio Varela



写真32 うるま園で開かれたウチナンチュ移民のゲートボール大会（1998年）
Gateball match for Okinawan immigrants held at Uruma Park

12 ペルーへ渡ったウラシーンチュ

Urashinchu Who Moved to Peru



南米の国々のなかで、沖縄から最初に移民したのがペルーです。1906（明治39）年から始まったペルー移民は、アシェンダと呼ばれる大規模な契約農場でサトウキビや綿花を栽培しました。やがて契約農場から出て、自分で農地を借りて綿花やジャガイモなどの野菜栽培をするようになりました。そのうち、多くは首都リマ市や地方都市に移動し、雑貨店、衣料品店、理髪店、飲食店などの経営を始めました。その頃、ペルーへ移民した人々の多くは、収入のよい生活をしていました。しかし、第二次世界大戦中には、日本人移民へのねたみから暴動事件が起こり、ウチナンチュも財産を奪われたりしました。ペルー政府は、日本人学校を閉鎖し、日本語新聞の発刊や日本語の使用を禁止しました。さらに、一部の日本人は敵性外国人^{てきせいがいこくじん}として外国へ追放されるなど、厳しい生活^{きび}を体験しました。浦添からペルーへの戦前移民は180人です。字別^{あざべつ}にみると伊祖、城間、西原、屋富祖、仲間、沢岬が目立って多くいます。戦後の沖縄移民は極めて少なく、浦添出身者については記録が残っていません。ただ、隣国ボリビアから2人が転住^{てんじゅう}した記録があります。

Of the countries in South America, it was Peru where emigrants from Okinawa first settled. Emigrants to Peru, who first arrived in 1906, cultivated cotton and sugarcane as tenant farmers. Eventually, they would lease their own farmland and grow cotton as well as potatoes and other vegetables. Many of these emigrants moved to the capital Lima or regional cities, and started general stores, clothing shops, barber shops, restaurants or other kinds of businesses.

Prewar emigration from Urasoe to Peru totaled 180 people. The number of emigrants from Okinawa after the war was very small and there is no record of anyone from Urasoe making the trip. However, there is a record of two people originally from Urasoe resettling in Peru from neighboring Bolivia.



写真33 リマの外港、カヤオ港
Callao Port



写真34 役員の多くをウチナンチュがつとめるカヤオ日本人商業組合（1931年）
Picture of a Japanese Trade Association gathering in Callao

13 ペルーの暮らし

Life in Peru

戦後は、生活も安定し、ペルーの一世移民は、子どもの教育に力を入れました。その結果、二世や三世からは、医師、弁護士、技師などが出ました。

浦添からペルーへ渡ったなかには、大きな活躍をした人物が何人もいます。

戦前には、農場の厳しい労働条件に耐えられず、着の身着のままで逃げだした移民を援助して「逃亡移民の父」と呼ばれた伊祖出身の豊里宇志がいました。

戦後は、国際テロリストのアビマエル・グスマンを逮捕した功績により、ペルーの国防警察長官になったマルコ宮城ミツオ氏（屋富祖出身二世）がいます。また、上原・仲宗根千恵子氏（牧港出身二世）は、女性で最初のペルー国家警察大佐に就任しました。ほかに、両親が開拓した耕地に、私費で野口英世学園を創設・運営している宮城ファナ・ユキエ校長（屋富祖出身二世）など、多くのウラシーンチュが、ペルー社会に貢献しています。



写真35 ペルー在住の浦添村人会の集まり（1961年）

Gathering of the Urasoe Village Association members residing in Peru

After the war, life also became more stable, and first generation emigrants to Peru put a high priority on their children's education. The result was the emergence of physicians, attorneys, engineers and other professionals from the ranks of the second and third generation Okinawan immigrants.

Of those who traveled from Urasoe to Peru, there are some people who were very successful. Throughout the prewar and postwar periods, many Urashinchus have contributed to Peruvian society.



写真36 ペルー現地調査に集った浦添同志会の人々 (2009年)
Emigrants from Urasoe living in Peru



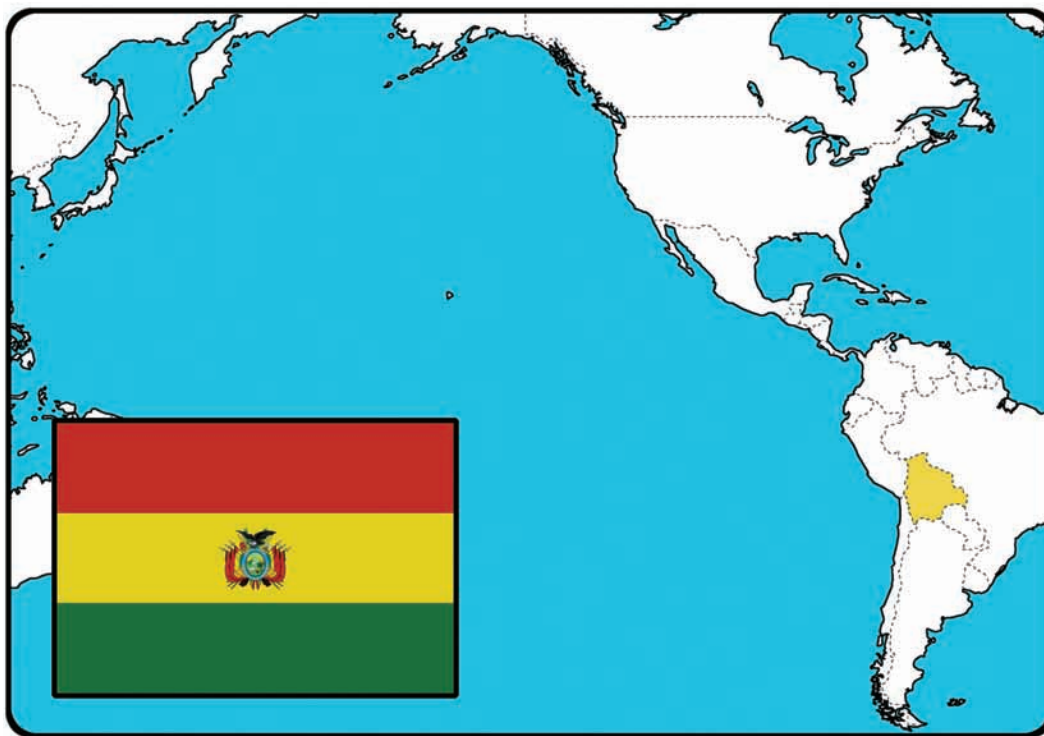
写真37 ウラシンチュニ世が運営する
学校・野口英世学園の児童
Children of the Hideyo Noguchi
School operated by second generation
immigrants from Urasoe

写真38 野口英世学園
The Hideyo Noguchi School



14 ボリビアへ渡ったウラシーンチュ

Urashinchu Who Moved to Bolivia



沖縄からボリビアへの移民は、戦前、ペルーへ移民した人々がボリビアへ転住したのが始まりだと考えられます。1910（明治43）年には、すでに数人のウチナンチュがボリビアに住んでいたことが記録されています。

戦後のボリビアでは、第二次世界大戦の被害で苦しむ沖縄の人々を呼び寄せようという運動が起こりました。これに琉球政府も賛成し、ボリビアへの計画移民がおこなわれました。

1954（昭和29）年、ボリビアへ渡航した人々は「うるま^{こうち}耕地」の開拓を始めましたが、85人がうるま^{ねつびょう}熱病にかかり、そのうち15人が亡くなりました。そこで、1955（昭和30）年8月にうるま耕地を出て、1957（昭和32）年8月に第1オキナワ移住地に移りました。その後、1959（昭和34）年に第2移住地、1961（昭和36）年9月に第3移住地が創設されました。浦添からは、1954年に渡航したのをはじめとして、合計43人が移り住みました。

オキナワ移住地は、10年間かけて、3,231人によって開拓されました。初期は、焼畑により、米（^{やきはた}陸稻）・トウモロコシ・豆類を生産し、やがて^{りくとう}養豚、^{ようどん}養鶏、

ぼくぎゅう めんか
 牧牛に加え綿花生産も始めました。オキナワ移住地の1戸あたりの耕地はかつての50haから250ha~300haに拡大しました。今では、小麦やサトウキビ栽培なども加わり、機械化農業を営んでいます。

Emigration from Okinawa to Bolivia is thought to have started with the relocation of people who had originally emigrated to Peru then moving on to Bolivia prior to the war.

After the war, a campaign arose to send for people from Okinawa who were suffering due to the destruction of World War II. The Government of the Ryukyu Islands also approved of this program, and planned emigration to Bolivia was carried out. In 1954, people who had moved to Bolivia started to develop the Uruma plantation, but 15 of them died of fever. So, the pioneers left the Uruma plantation in August 1955, and went on to establish the first Colonia Okinawa in August 1957. Later, the number two Colonia was founded in 1959, and the third Colonia in 1961. From Urasoe, 43 people relocated there to live.

Colonia Okinawa was pioneered by 3,231 people over a period of 10 years. In the beginning, rice, corn and beans were grown, and before long, hogs, chickens and cattle were added to the production along with cotton. The acreage per house in Colonia Okinawa expanded from the initial 50ha to 250~300ha. Now, in addition to wheat, sugarcane and other commodity cultivation, the Colonia also had mechanized agriculture operations.

写真39 第1オキナワ移住地の
 入口の門（2009年）
 Gate to Colonia
 Okinawa Number One



15 ボリビアの暮らし

Life in Bolivia

琉球政府による3,000人余りのボリビアへの計画移民は、第1・2・3オキナワ移住地に転住しました。しかし、さまざまな事情で約80%の人々が移住地を去り、現在、オキナワ移住地には約1,000人が生活しています。移住地の中心は第1移住地で、役場、学校、診療所^{しんりょうじょ}、教会、歴史資料館、ゲートボール場、球場などの施設が立ち並んでいます。また、沖縄ボリビア協会、サンタクルス市在住の沖縄移民を含むボリビア沖縄県人会があります。1998（平成10）年には、オキナワ移住地周辺の14の集落と合併して新しい行政区として、人口12,000人のオキナワ村が創設されました。ボリビアの地図のうえにも、しっかりとOKINAWAと記されています。

戦後の初期移民から50年以上が過ぎた現在、ボリビアには10,000人余りの日系移民が生活しており、その60%は沖縄県系人です。農家のほかに、医師、建築士などとして広く活躍しています。ボリビアのウラシーンチュは少なく、現在、オキナワ移住地に2家族、サンタクルス市に2家族が住んでいます。



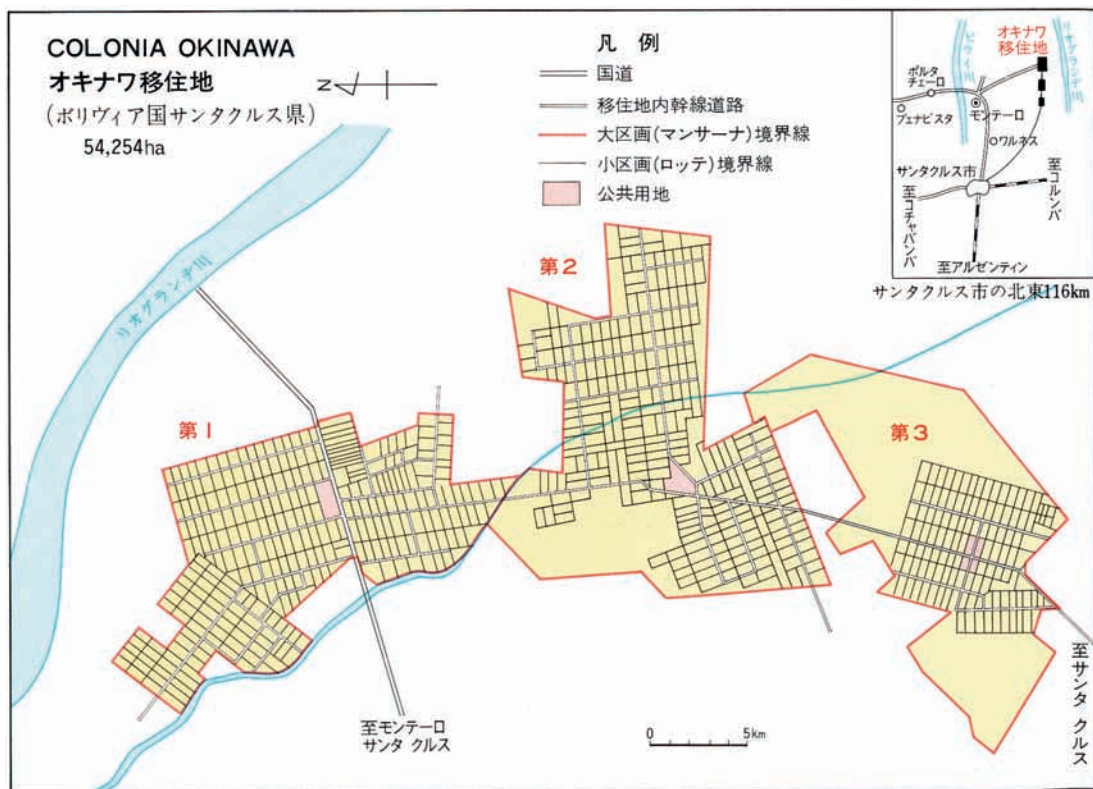
写真40 第1オキナワ移住地の
メインストリート（1989年）
Main street of Colonia
Okinawa Number One

写真41 空から見た第1オキナワ移
住地（1984年）

Colonia Okinawa Number
One viewed from above



地図 1 サンタクルス州オキナワ移住地



資料出所：『中南米移住地関係地図』国際協力事業団移住事業部編集発行、1987年

Planned emigration to Bolivia for over 3,000 people by the Government of the Ryukyu Islands sent people to live in the number one, two or three Colonia Okinawa. However, approximately 80% have left the settlements due to various reasons. Currently, about 1,000 people make their living in Colonia Okinawa. The main settlement is the number one Colonia Okinawa where there is a public office, school, clinic, church, history museum, gateball field, ballpark, Okinawa-Bolivia Association and the Bolivia Okinawa Kenjinkai. In 1998, the village of Okinawa was established with a population of 12,000 to form a new municipality incorporating 14 communities surrounding Colonia Okinawa.

Currently, there are over 10,000 Japanese immigrants living in Bolivia, and 60 percent of those are Okinawan. There are few Urashinchu in Bolivia with two families residing in Colonia Okinawa and two more in Santa Cruz, Bolivia.